

芥川龍之介「桃太郎」論：『罪と罰』における天才 などを参考に

河内，重雄
北九州市立大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/6796085>

出版情報：語文研究. 133, pp.25-39, 2022-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



芥川龍之介「桃太郎」論

—『罪と罰』における天才などを参考に—

河 内 重 雄

一 本稿の狙い

芥川龍之介「桃太郎」は、大正十三年七月発行の『サンデー毎日』に掲載された、短編小説である。作品梗概は以下の通り。

天地開闢かいびやくの大昔から、ある深い山の奥に一本の大きな桃の木があった。ある朝、一万年に一度つけるといふ桃の実が落とされ、谷川を流れてお婆さんに拾われた。その桃から生まれた桃太郎は、山や畑で仕事をするのがいやだったため、鬼ヶ島の征伐を思い立つ。老人夫婦に作らせた黍団子をもって、鬼ヶ島征伐の途に上った桃太郎。道中で犬、猿、雉を家来にする。この三匹は仲の良い家来ではなかったが、桃太郎は三

匹をうまくまとめ、鬼ヶ島征伐の途を急ぐ。

鬼ヶ島は天然の楽土というべきところで、平和を愛する鬼たちが安穩に暮らしていた。その鬼ヶ島にやって来た桃太郎は、三匹の家来に鬼を皆殺しにするよう命令する。無抵抗の鬼たちに対し「あらゆる罪惡の行はれた後」^(註)、降参した鬼の酋長に、桃太郎は宝と人質を差し出すよう命じる。なぜ攻撃されたのか分からない鬼の酋長が、自分たちはどのような無礼をはたらいたため征伐を受けたのか尋ねると、桃太郎は「三匹の忠義者を召し抱へた故」征伐に來たと答える。召し抱えた理由については、「鬼が島を征伐したいと志した故」黍団子をやって召し抱えたという。人質に宝物の車をひかせ、故郷に戻った桃太郎だが、生き残った鬼たちから命を狙われるなど、その後の人生は必ずしも幸福ではなかった。山奥の桃の

本は昔と変わらず無数の実をつけており、「未来の天才」がまだそれらの中に何人とも知れず眠っている。「桃太郎」（以下、本作とする）の作品梗概は以上である。

本作の先行研究の傾向についてだが、例えば関口安義氏は『芥川龍之介とその時代』^(注2)で、本作について次のように述べている。

さて、芥川と章炳麟との話題は、「現代の支那を中心とした政治や社会の問題だつた」という。（略）この時から数えて三年、「僻見」（『女性改造』一九二四・三・九）に漏らしていることばの方が、はるかに印象的である。次のようだ。

僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剝製の鰐^{わに}をぶら下げた書齋に先生と日支の關係を論じた。その時先生の云つた言葉は未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる。——「予の最も嫌惡する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本国民にも多少の反感を抱かざるを得ない。」先生はまことに賢人である。僕は度たび外国人の山県公爵を嘲笑し、葛飾北斎を賞揚し、洪沢子爵を罵倒するのを聞いた。しかしまだ如何なる日本通もわが章太炎先生のやうに、桃から生れた桃太郎へ

一矢を加へるのを聞いたことはない。のみならずこの先生の一矢はあらゆる日本通の雄弁よりもはるかに真理を含んでゐる。

（略）章炳麟の桃太郎批判には、侵略者桃太郎（日本人）というはつきりとした指摘がある。日本帝国主義、特に当時の日本政府の植民政策が糾弾されているのである。芥川はそれを鋭く察知し、そこに真理があるのを見抜くのであつた。

中国旅行から帰つて三年後、芥川龍之介は「桃太郎」（『サンデー毎日』一九二四・七・一）という小説を書いている。芥川の描く桃太郎は侵略者像をとる。（略）

日本の大正期、一九二〇年代半ばにこのような桃太郎像が刻まれていたのは、特筆に値する。芥川は勃興するプロレタリア文学に刺激され、この作品を書いた。

桃太郎を侵略者とし、日本帝国主義・植民政策への批判を読みとり、本作を初期プロレタリア文学と位置付けている。以前、そして以降の先行論も、桃太郎を悪人としている点で共通していると言つてよいだろう。佐藤嗣男氏は鬼ヶ島を攻撃する桃太郎たちに「中国に進出していく当時の軍国日本

の姿」を見て、「軍国日本の侵略の実態が告発されてい」として^(注3)いる。黄曉波氏は桃太郎と三匹の家来を天皇と内閣・陸軍・海軍とし、桃太郎たちが鬼ヶ島を攻撃したことを「日本帝国主義による対外侵略戦争」と捉えている。^(注4) 崎川美央氏は関東大震災における弾圧者の姿を桃太郎に見ている。^(注5) 以下のようだ。

(略) 出所もわからないきわめて曖昧な流言飛語によって朝鮮人・中国人や社会主義者であるというだけで虐殺された数々の弾圧事件と、これもまた曖昧な大義によつて「鬼」というだけで退治される「桃太郎」の筋書き。これが何の意図もなく偶然似ているのだとは考えがたい。

また、原田光三郎「芥川龍之介における主体の問題——「桃太郎」を中心^(注6)」は、芥川は桃太郎を「侵略者としてのイメージを付して造形した」と指摘する。繰り返しになるが、本作の先行研究は桃太郎を侵略者・弾圧者＝悪と解釈する点で一致していると言えよう。

桃太郎＝悪という基本軸が変わらなければ、侵略や弾圧の内容だけが入れ替わり続けることになると考えられる。本稿ではこの基本軸について少し検討してみたい。

二 桃太郎のイメージの変遷

先行論は本作の桃太郎を侵略者・悪としている。このような桃太郎像は、今日の私たちになじみ深い正義の桃太郎のイメージとはかけ離れたものであらう。桃太郎のイメージは歴史的に見て、どのように変化しているのであらうか。

桃太郎のイメージの変遷については、滑川道夫『桃太郎像の変容』^(注7)が詳しい。滑川氏によると、桃太郎の物語には、例えば桃太郎の誕生について桃から生まれる「果生型」と、老夫婦が桃を食べて若返り、桃太郎を生む「回春型」があるなど、様々なバリエーションがあった。私たちのよく知る桃太郎の物語は、桃から生まれた桃太郎が犬猿雉をお供とし、鬼ヶ島を攻め落として宝を得て凱旋、といったものであらう。このような形が基本形となったのは明治二十年代、小学校の教科書によるところが大きいという。

こうみてくると、この明治二十年版の教科書教材(文部省『尋常小学読本』——河内注)が、小波の桃太郎(明治二十七年)などにくらべると、はるかに簡素によくできているといっていいただらう。わかち書きにも創意がみられ、子ども向き

の表現で、しかも、江戸後期の「桃太郎噺」の本流の筋を定着させることに役立つていると思う。これから後の桃太郎教材は、これにふかい影響をあたえられているし、民間の桃太郎噺にも、大きな影響をあたえているのである。

〔国語教科書の桃太郎像〕

芥川が江東尋常小学校に入学したのは明治三十一年四月のこと。明治二十七年の『尋常小学 読書教本（普及社）』について、滑川氏は次のように述べている。

（略）鬼が島の鬼どもが集団をなして人を「苦しめ、宝物を掠める」から征伐するのだという理由を示している。これは、これまでの国語教材の「桃太郎」にはみられなかった特色である。征伐を正当化して整えようとした意図がみえる。征伐の場面も、桃太郎の武勇をたたえ、かつ、犬・猿・雉子との協力をうたいあげている点が注目される。こういう形で教訓材料がしだいに織りこまれていくのである。

〔国語教科書の桃太郎像〕

征伐の正当化や桃太郎の武勇の称賛が注目されるという。武勇については、明治三十三年の坪内雄蔵『国語読本 尋常

小学校用』（富山房）で、より強調されることとなる。

さて、この教科書の「桃太郎」でまず気づくことは、「ぢ」が山へいったのかどうか書かれていない。そして日清戦争における「皇軍の勇戦」の国民的興奮を投影してか、従来みられないほどの積極的な桃太郎像が形成されていることである。たとえば自発的決意のみなごったことばとして、「おにたいちにゆきますから、ひょーろーを、こしらへてください」と言わせている。ひょーろー（兵糧）は、当時の戦争や軍隊を想起させる用語である。鬼が島攻略も、桃太郎自身が「もんをやぶって、おし入り」、後陣で指揮をとる司令官ではなく、第一線の勇将として叙述されている。鬼の大將が降参したからには、遠慮なく、こだわらずに、へたな理由づけなしに、ごくすなおに「たからものをとつて」凱旋するというしくみになっている。（略）鬼の大將が前非を悔い、掠奪していた宝物をさし出したので、鬼の命を助け戦後に善政を施したなどという一切の理屈はぬきにしている。

〔国語教科書の桃太郎像〕

戦争や軍隊を想起させる言葉を使用し、桃太郎が第一線の勇将として描かれていると氏は指摘する。芥川が小学生の頃

は、基本の物語に戦争色が加えられていった時期と言えよう。ちなみに、この明治三十三年の教科書について滑川氏は、「初めの登場者猿が「桃太郎さん、桃太郎さん……」と、二回呼びかける形は、この本が最初であろう。」と述べている。明治三十二年発行のボンチ絵『改良ボンチ 日本一』にも二回呼びかける形が見られるため、この教科書が最初ではないようだが、本作にもみられる二回呼びかけの形はこの頃成立したのであろう。しかし、明治三十六年四月以降、教科書は国定教科書に一本化され、明治四十三年までの間、「桃太郎」は教科書から姿を消すこととなる。

教科書以外の「桃太郎」についても、明治期は戦争と関わりのあるものが少なくないようだ。明治二十七年に子ども向けに刊行された巖谷小波『日本昔噺 第一編 桃太郎』について、滑川氏は次のように指摘している。

ここで小波は、鬼が島征伐の理由づけをはっきりあたえる。皇国日本にあだをする憎き奴だから征伐するというのである。（略）

（略）江戸期の国学者系の思想をひいているばかりでなく、明治政府の打ち出した皇室主義の教學思想に同調する方向において「桃太郎像」を描いているといわなければならな

い。（略）教育勅語下賜、そしてその普及に力をそぐ当時の情勢が背景にあつたのである。そのうえ、この七月には、出兵した日本軍が朝鮮王宮を占領して武装を解除せしめ、八月には清国に対して宣戦を布告している。日清戦争という戦時色も強まる情勢が背景に動いていたのである。

（「文明開化過程の桃太郎」）

付け加えて言うと、作中で雉は桃太郎のことを「大日本の桃太郎將軍」と呼んでいる。明治四十一年刊行の巖谷小波『改訂袖珍 日本昔噺』収録の「桃太郎」でも同様に「大日本の桃太郎將軍」とされている。外国を攻める日本軍の將軍のイメージと言えようか。この頃の桃太郎のイメージについて、滑川氏は次のように述べている。

日清・日露戦争の前後は特に桃太郎噺を日本の海外発展の思想と結びつける傾向が強かった。（略）海外遠征によって島国日本の領土を拡張しなければ、先進諸国に列することができないという考え方がなんの疑いもなくおこなわれ、立志少年の情熱を、夢をあおる方向に結びつけた。桃太郎も、そうした海外遠征志向に結びつくわけである。

（「文学にあらわれた桃太郎」）

明治期の海外遠征志向の桃太郎像が、日清・日露戦争と密接なつながりがあるというのはうなずけよう。このような桃太郎像が大正期に侵略主義的だとして批判された、滑川氏は続けて指摘している。大正期の批判については、氏は別の個所で次のように述べている。

後者の「桃太郎」の歌詞をめぐって、大正期になってクレームがつく。なにしろ、日露戦争直後のナショナリズム高揚の波にのって作詞されたものだけに、大正デモクラシーの思潮からみると違和感が起る。封建的な侵略主義を次代の子どもたちに鼓吹していいのかという知識人の反発となつてあらわれてもふしぎはない。たとえば「征伐」「家来」「つぶしてしまへ」「分捕物」といった語彙が問題にされる。軍国主義的英雄像否定論とこの文部省唱歌が対立する。

(「詩歌の桃太郎像」)

明治期の「桃太郎」は侵略主義だとする知識人の批判、軍国主義的英雄像批判が展開された点に、大正期の特徴があると言えよう。例えば本作が発表された大正十三年の八月に、松村武雄他監修『日本童話集 上』(世界童話大系刊行会)が刊行されている。同書収録の「桃太郎」では、「侵略者のイメー

ジを極力さけようとしているかにみえる」と滑川氏は指摘する。大正十三年だと芥川の長男・比呂志は四歳、次男は二歳。芥川の子どもたちが読むことになる大正期の「桃太郎」は、侵略主義・軍国主義批判を意識したものであったと考えられよう。

明治期の桃太郎は日清・日露戦争を背景に、他国を攻撃する日本軍の大将のイメージで描かれ、受け取られている。そのような桃太郎像に対し、侵略主義的だという批判がなされた点に大正期の特徴がある。大枠として言えば、このようにまとめられよう。以上のような大正時代の雰囲気からすれば、本作に侵略者批判を読み取る先行研究の解釈は、一解釈として一定の妥当性はあると思われる。と同時に、このような大正時代の傾向は、本作の解釈を狭める要因ともなっていると見えそう。

三 本作の語り手について

先行研究では、本作で桃太郎がどのように語られているかは考察されているが、語り手についてはほとんど考察されていない。桃太郎の語られ方について考える前に、桃太郎を語る語り手の性格を少し確認してみたい。

まず、本作の語り手は、「わたし」という形で本文に姿を現していることから推測されるごとく、全知の語り手ではない。必ずしも信用できるとは限らない語り手である。「姫君に見とれてゐたらしい。」「姿を露はしたのではないであらうか?」「何でも猿の殺されたのは人違ひだつたらしいといふ噂」など、その語りには想像や伝聞が含まれている。視野が狭く、限られた範囲のことしか知らない語り手と言える。本作の二では、語り手は「猿は蟹の仇打ちを待たず、この時もう死んでゐたかも知れない。」と言っており、猿を殺すのは「猿蟹合戦」の白としている。しかしながら、本作の五では、「何でも猿の殺されたのは人違ひだつたらしいといふ噂」と言っており、猿は桃太郎と間違えられて鬼に殺されたとしている。二と五、離れているため気付きにくいだが、言っていることが明らかに矛盾している。繰り返しになるが、本作の語り手は、全面的に信用してよいとは言えない。

信頼性以外については、この語り手にはどのような特徴があるか。例えば本作の三には「我々の銀座を愛するやうに」とある。語り手の「わたし」は近代以降、もつと言えば作品が発表された大正当時の東京に、身を置いているように思われる。また、同じく本作の三には、「わたしはこの二十年来、かういふ疑問を抱いてゐる。」という語りが見られる。大正十

三年当時、芥川は三十二歳。語り手「わたし」を作者・芥川龍之介と重ねることも可能であろう。

言うまでもなく、語り手は鬼や動物ではなく人間である。本作の三には次のような一節が見られる。

(略) 殊にもう髪の毛の白い、牙の脱けた鬼の母はいつも孫の守りをしながら、我々人間の恐ろしさを話して聞かせなどしてゐたものである――。

「お前たちも悪戯をする、人間の島へやつてしまふよ。(略) 人間といふものは角の生えない、生白い顔や手足をした、何ともいはず気味の悪いものだよ。(略) 男でも女でも同じやうに、嘘はいふし、欲は深いし、焼餅は焼くし、己惚は強いし、仲間同志殺し合ふし、火はつけるし、泥棒はするし、手のつけやうのない毛だもののだよ……」

鬼の母は人間について、「嘘はいふし、欲は深いし、焼餅は焼くし、己惚は強いし」などと評している。直前で「我々人間」と語っている以上、この批評は桃太郎たちだけでなく、語り手自身にも当てはまってしまうということは、当然意識しているはずだ。嘘つきで欲深いだけでなく、自嘲癖もある語り手と言えようか。

批判が語り手自身にも当てはまってしまふということについては、次の語りも挙げることができよう。

(略) 酒顛童子も大江山の岩屋に酒ばかり飲んでゐたのは確である。その女人を奪つて行つたといふのは——真偽は少時間はないにしろ、女人自身のいふ所に過ぎない。女人自身のいふ所を悉く真実と認めるのは、——わたしはこの二十年来、かういふ疑問を抱いてゐる。あの頼光や四天王はいづれも多少氣違ひじみた女性崇拜家ではなかつたであらうか？。

語り手は頼光や四天王について、女性の言うことを疑いもせず、悉く真実と認めているのではないかと批判している。女人＝弱者と考えれば、弱者の言うことを悉く正しいとしている、という批判と解せられる。だとすれば、語り手自身、制圧された側＝弱者たる鬼たちを全面的に正しいとしているため、頼光たちへの批判は語り手自身に跳ね返ってくることになる。意識的か否かは定かでないが、自己批判のような形になっていると考えられる。

以上、本作の語り手の性格を簡単に確認してみた。必ずしも信用できない、芥川の分身とも考えられる、一筋縄ではない

かない語り手であると言えよう。そのような語り手であれば、桃太郎たちの行いを「あらゆる罪惡」としているからといって、桃太郎のことを素朴に悪人と思つて非難しているとは限るまい。本文の他の個所に注意を向けると、頼光たちへの批判が自身に跳ね返ってくるように、他の個所に注目することと「あらゆる罪惡」も異なるニュアンスを帯びるといったことも十分に考えられよう。次章ではこのことについて考えてみたい。

四 「あらゆる罪惡」と「天才」の接続

前掲の『桃太郎像の変容』には、滝沢馬琴『燕石雜志』(全五巻、文化七年)に見られる桃太郎についての考察が、詳しく紹介されている。日本近代文学館発行の『芥川龍之介文庫目録』(昭和五十二年七月)にもその名は見られ、芥川が『燕石雜志』をおそらくは読んでいたことが分かる。『燕石雜志』では桃太郎が鬼ヶ島を制圧し得たことを、桃の実の靈力と結び付けて解説しているという。本作の桃太郎が「天才」とされているのも、桃の実の靈力と無縁ではあるまい。

関口安義氏は本作を「僻見」(『女性改造』大正十三年三月・九月)と接続して解釈している。「僻見」では桃太郎に触れられてお

り、本作の語り手は芥川らしき語り手であるため、本作との接続は妥当と言えよう。「辭見」は「広告」、「斎藤茂吉」、「岩見重太郎」、「木村翼斎」の四章からなるが、氏の注目する章炳麟の桃太郎批判は「岩見重太郎」に見られる。この「岩見重太郎」の章には桃太郎以外にも銀座、罪惡、天才、扇など、本作に出てくる言葉が散見されるが、この章は主に英雄や豪傑について述べられている。以下はその一節。

第二に岩見重太郎は現代の空氣を呼吸してゐる人物――

たとへば後藤子爵よりもより生命に富んだ人間である。成程子爵は日本の生んだ政治的豪傑の一人かも知れない。が、如何なる豪傑にもせよ、子爵後藤新平なるものは恰幅の好い、鼻眼鏡をかけた、時々哄然と笑ひ声を發する、――兎に角或制限の中にちやんとをさまつてゐる人物である。甲の見た子爵は乙の見た子爵よりも眼が一つ多かつたなどと云ふことはない。それだけに頗る正確である。同時に又頗る窮屈である。(略)けれども岩見重太郎は、――岩見重太郎もをのづから武者修業の立をした豪傑と云ふ制限を受けてゐないことはない。が、この制限はゴム紐のやうに伸びたり縮んだりするものである。甲乙二人の見る重太郎は必しも同一と云ふ訳には行かぬ。それだけに頗る不正確で

ある。同時に又頗る自由である。象の体重を憫怍する甲は必ず重太郎の体重の象につり合ふことを承認するであらう。(略)これは肉体上の制限ばかりではない。精神上の制限でも同じことがある。たとへば勇氣と云ふ美德にしても、後藤子爵は我々と共にどの位勇士になり得るかを一生の問題としなければならぬ。しかし天下の勇士なるものはどの位重太郎になり得るかを一生の問題にしてゐるのである。この故に重太郎は後藤子爵よりも一層我々の情意の上に大いなる影響を及ぼし易い。

架空の豪傑は人々の理想や期待に合わせて、肉体的にも精神的にも自在に伸び縮みできる。それ故、今現在生きて実在している豪傑といえども、架空の豪傑を目標とすることになる。このようにまとめられよう。その目指すことになる豪傑の特色については、善惡の意識に煩わされないということが特に挙げられている。

(略)我々の心は未だ嘗て罪惡の意識を逃れたことはない。(略)「我」に対する信仰の薄い、永久に臆病なる我々は我々の中にある自然にさへ罪惡の意識を抱いてゐる。が、豪傑は我々のやうに罪惡の意識に煩はされない。(略)たとへば

神代の豪傑たる素戔鳴の尊に徴すれば、尊は正に千位置戸の刑罰を受けたのに相違ない。しかし刑罰を受けたにしろ、罪惡の意識は寸毫も尊の心を煩はさなかつた。さもなければ尊は高天が原の外に刑余の姿を現はすが早いか、あのやうに恬然と保食の神を斬り殺す勇氣はなかつたであらう。我々はかう云ふ旺盛なる「我」に我々の心を暖める生命の炎を感じるのである。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感じるのである。(略)

岩見重太郎の武勇伝(略)その最も興味のあるものは牢破りと拂退治との二つである。(略)重太郎は牢破りと共に人間の法律を蹂躪し、更に又次の拂退治と共に神と云ふ偶像の法律をも蹂躪したと云はなければならぬ。これは重太郎一人に限らず、上は素戔鳴の尊から下はミカエル・バクウニに至る豪傑の生涯を象徴するものである。いや、更に一步を進めれば、あらゆる単行独歩の人の思想的生涯をも象徴するものである。彼等は皆人間の虚偽と神の虚偽とを蹂躪して来た。将来も亦あらゆる虚偽を蹂躪することを辞せぬであらう。(略)

(略)いにしへの支那の賢人は車裂の刑を眺めたり、牛鬼蛇神の像を眺めたりしながら、堯舜の治世を夢みてゐた。(将来を過去に求めるのは常に我々のする所である。(略))

堯舜の治世は今日もなほ雲煙のかたに横はつてゐる。

善惡の意識に煩わされることなく、神や人間の法(「虚偽」)を蹂躪する点に、豪傑の豪傑たる所以がある。そして、一部繰り返しになるが、豪傑は基本的に過去に伝説的・架空の存在であり、将来の存在であつて、今現在実在している人を豪傑と称するのは好ましいとは言えない。以上のようにまとめてよいのではあるまいか。すでに関口氏が指摘しているように、章炳麟が桃太郎への嫌惡を述べており、「真理を含んでゐる」とされているが、桃太郎という名が置かれている「僻見」にはこのような文脈もまた認められる。章炳麟の攻撃する桃太郎は芥川によつて、日本人が目標とすべき、伸縮自在の、善惡の意識に煩わされることのない豪傑とされていると言へる。

嚴密に言えば、本作の桃太郎は豪傑や英雄ではなく「天才」とされている。が、鬼ヶ島で「あらゆる罪惡」を行ったにもかかわらず罪の意識に煩わされることがないなど、「僻見」で述べられている豪傑に重なるところがある。本作における天才は、「僻見」における豪傑や英雄に近いと考えてよいと思われる。

しかしながら、そもそも芥川は何をヒントに、「僻見」や本

作に見られるような豪傑・天才像を紡いだのであろうか。一つ可能性として考えられるのは、ドストエフスキー『罪と罰』で主人公・ラスコーリニコフらがするナポレオンの話である。ドストエフスキーについては、芥川龍之介「文章」〔女性〕大正十三年四月）には「ラスコルニコフ」の名が、芥川龍之介「文芸鑑賞講座」〔文芸講座〕大正十三年十月・翌年四月）には「ドストエフスキー」の名が出てくる。ナポレオンについても、「僻見」や「十円札」〔改造〕大正十三年九月）にその名が見られる。本作が発表された大正十三年七月前後の文章に名前が出てくることから、この頃芥川がドストエフスキーやナポレオンを意識していたことが分かる。また、「僻見」には次のような一節がある。

（略）成程豊臣秀吉は岩見重太郎に比べても、少しも遜色せんしよくはないかも知れない。けれどもそれは明らかに絵本太閤記の主人公たる伝説的人物の力である。（略）且又今人も無邪気なる英雄崇拜的になるものは大抵彼等の頭の上に架空の円光を頂いてゐる。広い世の中には古往今来、かう云ふ円光の製造業者も少からぬことは云ふを待たない。たとへばロマン・ロオラン伝を書いた、善良なるステファン・ツワイグは正に彼等を代表するものである。

豊臣秀吉などの実在の人物も死んで過去存在となり、作家等によつて「伝説的人物」とされれば、岩見重太郎などのフィクショナルな英雄と比べても遜色はなくなるという。実在したナポレオンの話をヒントに、芥川がフィクショナルな桃太郎を描いたというのもあり得ぬ話ではあるまい。ついでに言えば、本稿第二章で確認したように、桃太郎は將軍とされてきた歴史がある。本作でも三匹の家来は「兵卒」とされており、本作の桃太郎にも軍人的な要素があると解せられる。この点もナポレオンと重なる。また、本作の桃太郎は「必ずしも幸福に一生を送つた訳ではない」とされているが、ナポレオンの晩年も周知のように必ずしも幸せなものではなかった。幸不幸は天才であることと関係ないというメッセージを本作は発しているようだが、必ずしも幸福ではなかった点なども、ナポレオンと重なると言えよう。

それでは、『罪と罰』ではナポレオンについて、どのような会話がなされているのかを確認してみたい。以下は工藤精一郎訳『罪と罰』（注）からの引用である。

「（略）例えば、法律の制定者や人類の組織者であつても、つまり古代の偉人からリキュルゴス、ソロン、マホメット、ナポレオン等々にいたるまで、新しい法律を定めて、その

こと自体によって、社会が神聖なものとあがめ、父祖代々伝えられてきた古い法律を破棄し、しかも血が彼らのしごとを助けることができると思えば（往々にして古い法律のためにまったく罪のない血が、勇敢に流されたものですが）、むろん流血をも辞さなかった、という一事をもつてしても、一人のこらず犯罪者だった。これらの人類の恩人や組織者の大部分が特におそるべき虐殺者だったということは、むしろおどろくべきことです。要するに、多くの結論は、偉人はもとより、ほんのわずかでも人並みを出ている人々はみな、つまりほんのちよつぱりでも何か新しいことを言う能力のある者はみな、そうした生れつきによって、程度の差はあるにせよ、ぜったいに犯罪者たることをまぬがれないのだ、ということです。（略）人間は自然の法則によって二つの層に大別されるということです。つまり低い層（凡人）と、これは自分と同じような子供を生むことだけをしごとにしていくいわば材料であり、それから本来の人間、つまり自分の環境の中で新しい言葉を発言する天分か才能をもっている人々です。（略）第一の層、つまり生殖材料は、一般的に言うところ、保守的で、行儀がよく、言われるままに生活し、服従するのが好きな人々です。（略）第二の層は、みな法律をおかしています、その能力から判断して、破壊

者か、もしくはその傾向をもつ人々です。これらの人々の犯罪は、むろん、相対的であり、千差万別です。彼らの大多数は、実にさまざまな形において、よりよきもののために現在あるものの破壊を要求しています。そして自分の思想のために、たとえ血を見、死骸をふみこえても進まねばならぬとなると、ほくに言わせれば、ひそかに、良心の声にしたがつて、血をふみこえる許可を自分にあたえるでしょう（略）

（第三部）

「（略）かりにナポレオンが多くの立場にあつて、しかも栄達の一步を踏み出すために、（略）その婆さんの長持から金を盗み出すために（略）どうしても殺さなければならぬ、しかも他に道はない、としたらだ、彼はその決心をするだろうか？ これは偉業とはあまりにも程遠いし、しかも……罪悪だ、という理由で、二の足を踏みはしないだろうか？（略）彼はそんなことにためらいなど感じないどころか、それが偉業であるとかないとか、そんなことは考えもすまい……何をためらうのか、ぜんぜんわかりもしないだろう、とさとしたとき、ほくはたまらなく恥ずかしくなつた。もし彼に他の道がなかったら、つまらんことはいっさい考えずに、あつという間もあたえないで、いきなり絞め

殺してしまったにちがいない！」(略)

「(略) また、人間がしらみか？　なんて疑問をもつのは——つまり、ぼくにとつては人間はしらみではないということ、そんなことは頭に浮ばず、つべこべ言わずに一直線に進む者にとつてのみ、人間がしらみなのだということくらい、ぼくが知らなかったと思うのかい？　ナポレオンならやっただろうか？　なんてあんなに何日も頭を痛めたということは、つまり、ぼくがナポレオンじゃないということ、はつきりと感じていたからなんだよ(略)」

(第五部)

引用はいずれもラスコーリニコフの台詞である。前者では、ナポレオンなどの偉人は多かれ少なかれ法律を犯す犯罪者だと述べられている。後者では、ナポレオンは人を殺す時などに罪の意識に煩わされることはない、とされている。ラスコーリニコフ以外の登場人物だと、例えばスヴィドリガイロフがラスコーリニコフについて、「ナポレオンにすっかり傾倒していたようです。つまり特に彼を惹きつけたのは、多くの天才たちはちっぽけな悪には見向きもしないで、平気で踏みこえて行っただけな事実ですよ。」(第六部)と述べている。「僻見」の岩見重太郎や本作の桃太郎に通ずるイメージと言えよ

う。

これら以外にも『罪と罰』には「僻見」や本作の内容を思わせる箇所がいくつかある。再び『罪と罰』から引用してみよう。

『いや、ああいう人間はできがちがうんだ。いっさいを許される支配者というやつは、ツォロンを焼きはらったり、パリで大虐殺をしたり、エジプトに大軍を置き忘れたり、モスクワ遠征で五十万の人々を浪費したり、ヴィルナ(略)でしやれをとばしてごまかしたり、やることがちがうんだ。それで、死ねば、銅像をたてられる、——つまり、すべてが許されているのだ。いやいや、ああいう人間の身体は、きつと、肉じゃなくて、ブロンズでできているのだ！』

(第三部)

ナポレオンなどは、どんなとんでもないことをしても死後に銅像を建てられ許されるという。「僻見」では、実在の人物も死後に作家等によって「伝説的人物」とされれば、フィクションな英雄たちと違いがなくなると述べられていた。銅像が建てられるというのは、「伝説的人物」とされるということとを思わせるのではあるまいか。また、『罪と罰』には次のよ

うな一節も見られる。

「(略) ただ一つわかつていることは、この二つの層およびその更にこまかい分類に属するすべての人々の生れる順序というものが、ある自然の法則によってきわめて正確に定められているものらしい、ということです。その法則は、もちろん、まだ発見されていませんが、しかしそれが存在すること、そしていずれは発見されるにちがいないことを、ぼくは信じています。おびただし数の人々、つまり材料はですね、ある努力をへて、今日もなお神秘的なあるプロセスを通して、さまざまな種族のある配合という手段によって、ついに、たとえ千人に一人でも、いくらかでも自主的な人間を、全力をふりしぼってこの世に生み出すという、ただそれだけのために生きています。もっと広い自主性をもつ人間は、一万人に一人くらいかもしれません(これはわかりやすくするために、大まかな数字ですが)、さらに広大な自主性をもつものは、十万人に一人でしょう。天才的な人々は百万人に一人でしょうし、偉大な天才、人類の完全な組織者などは、何世代にもわたる何十億という人々の中からやっと一人であるかでないかでしょう。(略)」

(第三部)

天才の誕生には自然の法則があるとラスコーリニコフは言う。これなども、本作の一で、桃の木は「一万年に一度実をつけ」る、実は「一千年の間は地へ落ちない」などと語られていることを思わせよう。繰り返すが、芥川が本作や『僻見』を書く上で、『罪と罰』を参考にした可能性はあると思われる。

『僻見』や『罪と罰』の内容を確認した上で、本作を解釈するとどうなるか。桃太郎たちは鬼ヶ島で「あらゆる罪悪」を行ったと語られている。一見すると、語り手は桃太郎を大悪人として非難しているように見える。しかし、『罪と罰』等を参照すると、「あらゆる罪悪」は、「天才」という言葉と結び付けて理解し得るということに気付かされる。

天才論の文脈で言えば、語り手は桃太郎を悪人として批判している訳ではない。むしろ逆である。これから現れるべき、目標たる天才として語っていると解せられる。「あらゆる罪悪」は、天才がこたわるべきものではないとして挙げられていると考えられよう。

英雄や天才は読者の理想や想像を悉く受け入れる器のようなものである。そのような器であるためにも、今現在生きて実在している、想像の余地の限られている人ではなく、過去か未来の存在でなければならない。鬼ヶ島や「あらゆる罪悪」

も、例えば過去の侵略された中国や朝鮮人虐殺などを、検閲を考慮してばかりして表現したものではない。それらは読者の過去と未来に関するどのような想像をも受け入れる、抽象度の高い言葉である。読者の目指す未来、理想の自己像に合わせて、どのようなものでもあり得る記号Xと言えよう。

現代の私たちは、今現在まだ生きている人を天才と称することに疑問を抱かない。そのような天才は個別具体的で、聞き手や読み手の想像の余地はほとんど残されていない。芥川は天才を、一癖ある語り手や、「あらゆる罪悪」など抽象度の高い記号とともに、物語世界に閉じ込めた。本作は、天才はいかに語られるべきかを示した作品と考える。

注

注1 以下、芥川龍之介の作品の引用は『芥川龍之介全集 第十一卷』（平成八年九月 岩波書店）による。本稿における引用文中の傍線は全て筆者によるもので、ルビは適宜省略した。

注2 平成十一年三月、筑摩書房。

注3 「芥川龍之介「桃太郎」——お前たちも悪戯すると、人間の鳥へやつてしまふよ」（『文学と教育』平成十七年五月）。

注4 「隠蔽されたストーリー——芥川「桃太郎」の生成について」（『文学研究論集』平成十九年三月）。

注5 「芥川龍之介「桃太郎」論——啓蒙家としての芥川龍之介」（『富大比較文学』平成二十三年十二月）。

注6 『論叢国語教育学』（平成二十七年七月）。

注7 昭和六十二年三月、第二版、東京書籍。

注8 文部省『尋常小学唱歌』（明治四十四年五月）の「桃太郎」の

歌詞。六番まであり、一番の歌詞は「桃太郎さん桃太郎さん、お腰に付けた黍団子、一つわたしに下さいな。」。

注9 上下巻、昭和六十二年六月、新潮社。

（こうち しげお・北九州市立大学文学部准教授）